

## 熊本大学GP ミニシンポジウム 2006 実施報告

行事名	熊本大学GP「学習と社会に扉を開く全学共通情報基礎教育」ミニシンポジウム 2006
主催者	熊本大学
日時	平成 18 年 12 月 19 日 10 時 00 分 ~ 15 時 40 分
報告者	熊本大学総合情報基盤センター長 宇佐川 毅
報告日	平成 19 年 1 月 1 日

### 実施したイベントの成果

今回のイベント(ミニシンポジウム)は、現代社会における"基本ライセンス"とも言える情報基礎教育、情報リテラシーについての素養を学生に習得させるために、高等教育機関として、いま何をし、今後どのように展開すべきかについて議論するために企画されたものであり、国内外3名の先生に講演を行っていただいた。

国内の招待講演者から、それぞれの大学における情報基礎教育の実施の実情について伺うことができた。高等学校における教科「情報」を履修済みの学生を迎え、各大学の情報教育におけるカリキュラム等の変更や対応、本年度入学者の知識と技術の両面での情報リテラシーの修得状況や、現在の高等学校における教科「情報」の実施状況など、今後の本事業の展開に大きな影響を及ぼす可能性のある情報・データを得ることができた。

金沢大学において実施された教科「情報」に関する幅広い調査(教科書、学生の履修状況など)に基づく報告より次の点を知ることができた; 1)大部分の高校では「情報A」が主な実施対象である、2) コンピュータとインターネット利用の基本操作のできない学生はほとんどいない、3)多くの学生がOFFICE系ソフトウェアの詳細な利用法に若干の不安を残している、4)情報モラルなどの「情報B、C」と関係の深い内容については未履修もしくは理解が不十分である。

広島大学における基礎情報教育に関する報告では、"コンピュータ不安尺度" (愛知教育大学)を利用した学生のコンピュータリテラシーに関する調査と、"オペレーション不安" に対する調査結果を踏まえたクラス分け実施などについての取り組みが紹介された。教科「情報」の履修、習得度と"コンピュータ不安" の調査結果には、相関があまり見られないとの興味深い報告も受けた。

海外の招待講演者からは、特に、本事業において開発を進めている eラーニングコンテンツに関する海外の先進事例について伺うことができた。学習者は講義内容のすべてを記憶に留めておくことは困難であるとの考えから、"Information Transfer Approach からの脱却" という指摘がなされ、効果的な学習の原則は何か(能動的学習、完全習得学習、協調学習)を改めて問い直し、それらに基づいたオンライン学習コースを構築しなくてはならないことを強調された。その 1例として、教授システム学分野において注目を集めているGBS(Goal Based Scenario)を採用したコミュニケーションと社会技能を教授するeラーニングシミュレーション(EPA)が紹介された。GBSによる教育シミュレーションは、高い教育効果を示す一方で、莫大な開発時間とコストを必要とする。学習経験の良いところ(learning by doingや失敗による学習)を継承しつつ、安価かつ、短時間にコースを開発する方法を模索した結果として考案された教育プログラム(APPLE: Authentic Professional Practices Learning nvironment)についても紹介された。APPLEは完全なシミュレーションを開発することをやめ、開発コストを抑えて費用を実施コストに回し教師を使って教育を実施する方法である。APPLEを実践し、優秀かつ、実践力をともなった人材の輩出に成功している例として、Carnegie Mellon 大学西校コンピュータサイエンス専攻や企業内教育の事例が示された。

国内の情報教育、eラーニングを取り入れた教育を実践されている参加者と、様々な情報を共有することができたこと、今回の講演において得られた情報、知見について、講演者を含む参加者と忌憚のない意見交換ができたことも今回のイベントの成果の一つである。

## 今後の事業への反映

3名の先生方の講演はどれも非常に示唆に富んだ講演であり、大変豊かつ興味深いデータを得ることができ、また、大学における情報基礎教育の意義と重要性を本事業に関係するすべてのスタッフ間において再認識することもできた。現在の高等学校における教科「情報」の実施状況等並びに、コンピュータ不安調査に関するデータは今後の本事業の展開に大変役立つデータであり、同時に今後考慮していくべき多くの示唆を示すものであると考える。また、他大学において実践されている情報基礎教育の内容や方法については、本学においても模倣し実践する価値のある点が多くみられた。それらを次年度以降の本学の教育、テキスト改訂に取り入れて行きたいと考えている。さらに本務において開発を進めている、情報教育に関するeラーニングコース、コンテンツやAPPLEにより採用されているコンセプト、手法を積極的に取り入れ、今後の開発に努めたいとも考える。今回得られた様々な知見を本事業スタッフ内にて様々に検討し、熊本大学における情報教育の改善に役立てていくだけでなく、開発されたコンテンツ、知識、情報を社会へ還元する際に役立てて行くつもりである。

[pagetop▲](#)

## 参加人数

31名(熊本大学 21名、熊本大学以外 6名、一般企業 3名)

[pagetop▲](#)

## シンポジウムの様子



熊本大学副学長 足立 啓二



金沢大学総合メディア基盤センター  
松本 豊司 先生



広島大学情報メディア教育研究センター  
隅谷 孝洋 先生



ノースウェスタン大学 教育・社会政策学科  
Menachem Jona 先生



会場の様子

[pagetop▲](#)

[前のページへ戻る](#)